

IBD 患者へ向けた適正な食事療法の提案

研究分担者 長堀正和 東京医科歯科大学医学部附属病院臨床試験管理センター 准教授

研究要旨：IBD（特にクローン病）患者の食事指導は病態等の異なる患者ごとの個別指導となり、統一した指導指針の作成は容易ではない。実際、その重要性が患者にも広く認識されており、個々の患者の知識、情報源、個人的体験などが、時に指導を難しくしている可能性がある。今年度は、実際に指導を行っている管理栄養士を対象に、指導の実態（アンケート）調査を行った。調査結果は来年度に論文発表を行い、具体的な指針作成に向けた研究の参考になると思われる。

共同研究者

岡崎和一（関西医科大学香里病院）

安藤 朗（滋賀医科大学消化器内科）

藤谷幹浩（旭川医科大学内科学講座消化器血液腫瘍制御内科学分野）

竹内 健（辻仲病院柏の葉消化器内科）

穂苅量太（防衛医科大学校内科）

渡邊知佳子（国際医療福祉大学三田病院消化器内科）

藤井久男（平和会吉田病院 消化器内視鏡・IBD センター）

馬場重樹（滋賀医科大学消化器内科）

長沼 誠（関西医科大学消化器内科）

江崎幹宏（佐賀大学医学部消化器内科）

加藤 順（千葉大学大学院医学研究院消化器内科）

畑 啓介（日本橋室町三井タワー・ミッドタウンクリニック）

東大二郎（福岡大学筑紫病院外科）

石毛崇（群馬大学小児科学）

南部 隆亮（埼玉小児医療センター消化器肝臓科）

萩原 真一郎（大阪母子医療センター消化器・内分泌科）

平岡佐規子（岡山大学病院消化器内科）

谷田諭史（名古屋市立大学消化器代謝内科）

梁井俊一（岩手医科大学消化器内科消化管分野）

A. 研究目的

IBD 患者（特にクローン病患者）における食事指導の実態を把握し、公平で科学的な食事指導方法を探索する。

B. 研究方法

本研究班参加施設に依頼し、各施設の管理栄養士を対象に、IBD 食事療法に関する実態（アンケート）調査を行った。調査内容は回答する管理栄養士の属性（経験年数など）と指導内容を対象としたが、主な調査事項は以下の通りである。

- 小児患者の指導の有無
- 指導患者人数（月）
- 指導依頼理由
- 「1回の指導」の回数及び複数回の場合の間隔
- 「1回の指導」の所要時間（合計）
- 指導の際の同伴の有無
- 指導前の患者の評価及び使用するツール
- 身体計測等の評価
- 血液検査
- 指導内容
- 指導の評価及びその評価指標
- 自由記載（食事指導の課題、ニーズ）

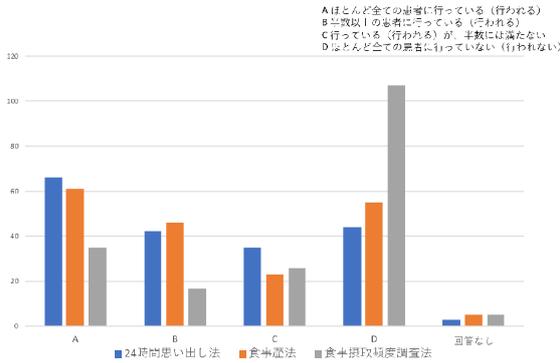
(倫理面への配慮)

診療実態の共有として収集した既存データを解析する研究ということで、東京医科歯科大学医学部倫理審査委員会にて研究が承認された。

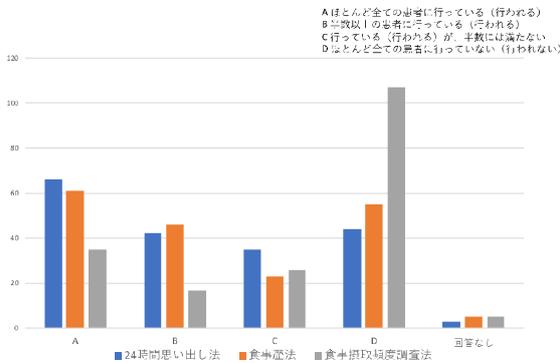
C. 研究結果

56 施設より回答が得られ、有効回答数は 190 人（管理栄養士）であった。回答は 1 施設ごとに 1-14 人（中央値 3 年）、クローン病の指導年数は 0-45 年（中央値 8 年）であった。以下はその結果の一部抜粋である。現在、調査事項の結果について、管理栄養士の指導歴などの説明変数とした解析を行っている。

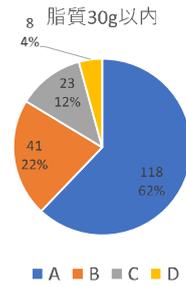
VI 指導前の栄養食事調査



VI 指導前の栄養食事調査



X 指導の内容について教えてください。



A ほとんど全ての患者に行っている (行われる)
 B 半数以上の患者に行っている (行われる)
 C 行っている (行われる) が、半数には満たない
 D ほとんど全ての患者に行っていない (行われない)

D. 考察

その特殊性から、クローン病患者の診療が専門施設に集中すると推察すると、本研究班参加 56 施設で指導を行っている管理栄養士 190 人の調査結果は本邦での実態を代表するものと思われた。来年度には解析の詳細を報告予定である。

E. 結論

全国のクローン病の専門施設で指導を行う管理栄養士を対象に、クローン病患者の食事指導に関する実態調査を行った。その結果は来年度に詳細に公表予定である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

本研究の結果の解析は終了し、現在、論文作成中である。

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし